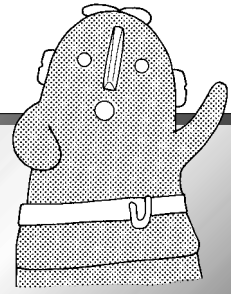


千代西原遺跡

～縄文時代の石鏃製作工場～



はじめに

西原遺跡は、江南台地縁辺部より約500m程南に入った、標高72m前後の平坦地に位置しています(第1図)。

遺跡は、1990年から91年にかけて、ゴルフ場の造成に伴い、千代遺跡群発掘調査会によって約57,000㎡の発掘調査が行われています。調査の結果、旧石器時代の石器や、縄文時代・平安時代の村の跡が見つっていますが、今回は縄文時代について紹介したいと思います。

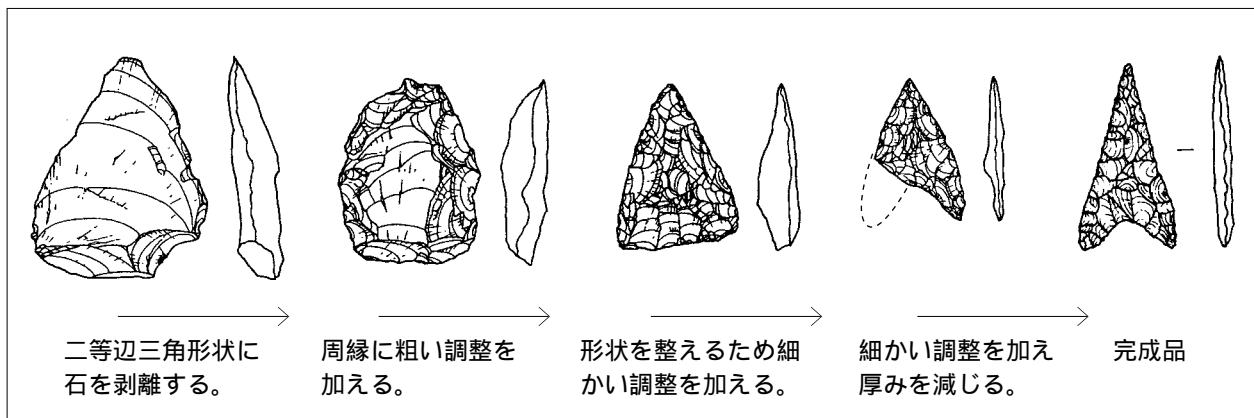
てある程度の計画性または規制が働いていたことがうかがえます。遺跡全体調査したわけではありませんが、全体ではおよそ100軒以上の住居跡が存在しているものと推測されます。ただし、

遺跡の概要

本遺跡は、今からおよそ3,500年前の縄文時代中期の加曽利E式期と呼ばれる時期の後半に属する住居跡52軒が確認されています。この他、屋外の調理施設である集石土壇^{どこう}10基、貯蔵穴または墓と考えられる土壇200基が、東西400m、南北250mの範囲で確認されています。比較的短期間に営まれた大規模なムラであり家々の位置は不完全ながらも環状を呈しており、居住に際し



第1図 遺跡の位置(1/20,000)



第2図 石鏃の製作工程

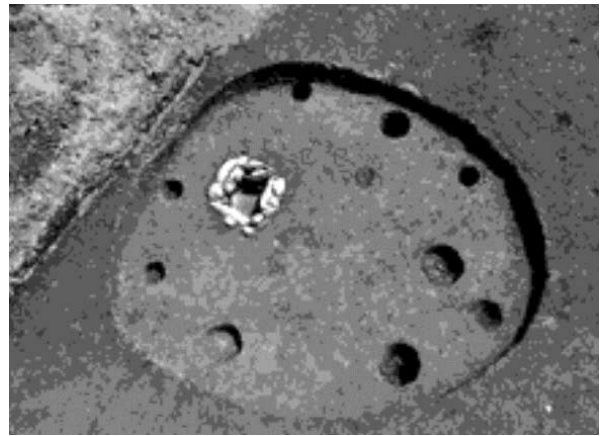
一時期に同時存在していた住居はせいぜい4～5軒程度であったと思われます。

集落の西側からは、石鏃^{せきぞく}（矢じり）300点、石鏃未製品450点、チップ（石屑）3,500点等が集中して出土しています。このような例は県内でも非常に珍しく、本遺跡が石鏃の製造工場として機能していたことがうかがえます（第2図）。

調査で出土した遺物はコンテナ箱にして約700箱を数え、土器はその大半が加曾利E式土器と呼ばれる縄文時代中期後半に属するものが占めています。珍しいものとしては、土製の耳飾り、土偶、垂飾り^{たれかざ}（ペンダント）、鳥頭形^{とりがしら}の把手^て等が出土しています。

石器は打製石斧^{だせいせきふ}（土堀具）が最も多く約2000点、ついで磨石^{すりいし}（粉碎具^{ふんさい}）が約1000点、石皿^{いしひら}が約300点、敲石^{たたきいし}（敲打具^{こうだ}）270点が出土しています。石器の組成からみると、縄文人は狩りで動物性食料を主に得ていたのではなく、木の実・根菜類の植物性食料を主食としていた事がうかがえます。

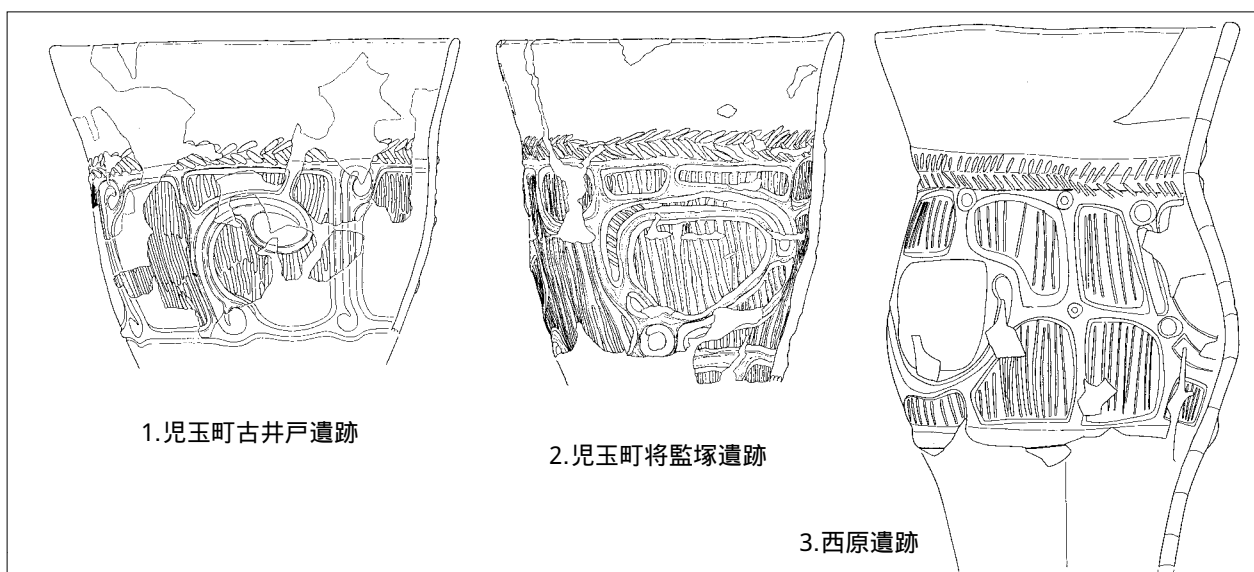
下図の3つの土器は、器形・文様構成等非常に良く似た土器です。「連結渦巻文土器」と呼ば



西原遺跡 住居跡

れているもので、1は児玉町古井戸遺跡、2は児玉町将監塚遺跡、3は江南町西原遺跡から出土したものです。古井戸遺跡と将監塚遺跡は隣接した双環状を呈する、縄文時代中期の県北地方で最大の拠点的な集落跡です。この土器は、この両遺跡を中心に、群馬県藤岡市から江南町付近までの非常に狭い範囲で確認されています。関東地方ほぼ全域に分布する加曾利E式土器の文化圏にありながら、その中における小文化圏の存在を想定できる興味深い資料であると考えられます。

< 江南町教育委員会 >



第3図 「連結渦巻文土器」